

養護施設への提言

内 田 知 己

Some Suggestions for Desirable Treatment of the Residents in Child Care Institutions

Tomomi Uchida

Summary

1. Since the child care institutions were established in the latter part of the nineteenforties, main purposes of the care of the orphans had been to guarantee their food, clothing and housing.

Nowadays the residents there consist of various kinds of children, such as brothers whose parents are missing, ill-treated infants, mentally retarded, juvenile delinquents and students suffering from school phobia.

The principles and techniques regarding protective care are expected to cope with this new situation, but the actual state of affairs can't be said having broken the convention.

2. Some suggestions both to child guidance centre, and child care institution.

- (1) Child guidance should make more detailed and substantial case records and send many sheets of the copies to the institution before the admission (at least five days in advance) so that every worker may look over the case records carefully and establish elaborate programs for protective care.

- (2) As a training school for the future domestic man or woman, the institution is expected to make much more special efforts to teach the residents household affairs, home rules manners thoroughly in practice.

In order to realize greater results, so called "home stay training" would be very effective means.

- (3) To conquer the lack of spontaneity which has been pointed out as a remarkable defect in the character of the residents, too many regulations and unsparing commands should be limited as few as possible, while the residents are desirable to be given as many chances as possible to act of their own will.

序 言

児童福祉法に拠る養護施設は既に30余年の歴史を閲している。

当初、戦災浮浪児等、直接間接に今次大戦の犠牲となった不遇な児童に、とりあえず衣食住を供するcustodial care 的施設としてスタートしたのであるが、現在の養護施設はその入所理由・年齢構成・純養護ケース以外のものの増加、及び保護者の状況等において戦後初期の状況に比べると著しい変化を示している。

入所理由の多様化は、特に現在の養護施設の特徴を端的に示している。

▲ 養育不適切	153人（22.0％）
▲ 親の家出	126人（22.4％）
▲ 親の傷病	98人（17.4％）
▲ 離 婚	82人（14.5％）
▲ 親の死亡	46人（ 8.2％）
▲ そ の 他	58人（10.3％）

注1. 親の死亡8.2％となっているが、両親死亡のケースはその半に過ぎない。

注2. 「その他」9.8％の殆どは教護、解法ケースである。

なお、養育不適切のケースの中にも教護、解法のものが多い。

注3. 純養護ケースの大部分は母子分離の精神的外傷を蒙っている。

（宮崎県 昭. 57. 12）

このようなケースの多様化、構成児童の変化は、当然、養護理念・養護の内容・それに応じた指導技術、並びに保護者への対応、アフターケア等に施て旧套からの画然たる脱皮を必要とする。

居住型施設としての物理的条件、即ち、居室・学習室・食堂・娯楽室・屋外遊戯場——等の改善及び処遇内容（生活条件）の向上については国・地方公共団体もかなりの意を用い、ある程度の成果も挙がっている。

しかし、新しい時代の要請に応えることの理解はなされながらも、諸々の制約のため依然として旧態のままにとどまっている、と難ぜざるを得ないものも少なくないし、長年の施設経営の間に形成された固定観念、或いは偏狭なドグマティックな理念が新しい流れに棹をさしているむきも皆無とは言えない。

また、人間の恐るべき心理的弱点の一つである一種の心理的マヒに基く批判力の欠如から、児童の処遇が甚しくマンネリズム的なものに墮し、これがため一個の人間としての児童の尊厳さが見忘れられている——しかも、そのことの認識すらない、という事実があることも否定できない。

本稿では敢てこれらの点を別括し、望ましい養護へのアプローチが図られるための提言をこころみたい。

今回は数多くの問題点の中からとりあえず“入所児童の受入れ”及び“養護の家庭化”の二点についてのみ論ずる。

1 入所児童の受入れ

(1) 出産としての入所

養護施設の養護は児童の入所とともに開始されるのではない。そのことは出産にたとえられよう。

言うまでもないことだが、子どもがこの世にすこやかな生を享けるよう胎内にいるかなり早い時期から入念な準備がなされ、出産に際しては順調に胎内から胎外にその“居”を移すことができるよう懇篤なるケアが施される。そして、呱呱の声をあげた嬰兒をすべての人が歓迎し、予め定められた計画に従って成長発達を図っていく。

産まれてから急遽、嬰兒の受入れの態勢を整えたり、“歓迎される子”として冷ややかに遇する——とまではいなくても、しごくビジネスライクに処遇が進められていく、ということは通常ありえない。

施設入所は、その児童にとってはいわば第二の出産である。母親の胎内から胎外という新しい生活に居を移すのと全く同じである。

しかも、未知との遭遇を強いられた彼は淋しさ・不安・恐れ・そしてしばしば怨み等の強い情緒に苛まされている。

彼の心はseparation trauma（分離外傷）にひどくいためつけられている。

この児童の受入れが、甚しくビジネスライクに、かつ、児童の人格をないがしろにした形でなされていくなれば、彼は更に新しい心理的外傷を蒙ることになり、これが今後の施設生活への適応を少なからず阻むおそれなしとしない。

さきに「児童の尊厳が見忘れられる、云々」と言及したのはこの点でもある。

(2) 受入れのためのプロセス、準備

入所措置の決定後、児童相談所側に於ては

▲入所についてのオリエンテーション

（ケースによっては施設の職員の来所を求めることもある。）

▲入所ケースについて、予め施設側に通知する。

施設側に於ては、通常つぎのことが求められる。

ア. 物的条件の整備

居室・食卓・学習席等を決めておく。支給または貸与すべき物品の整え・その他。

イ. 心理的条件の整え

(ア) できれば、児相に保護中の入所予定ケースに面接しオリエンテーションを行う。

(イ) 予め十分なるケース・スタディを行い、処遇方針を策定する。

(ウ) 新入所児童について予め他の園児にも十分知らせ、新しい家族の一員として快よく迎え入れ、好ましい人間関係づくりが図られるよう指導しておく。

ウ. その他

(ア) 転校先の学校への連絡

（できるだけケースの内容を把握してもらう配慮が必要である。）

(イ) 地域の子ども会等、新入所児童の所属が予想される団体等への連絡。

(3) 問 題 点

まずあげざるを得ないのは、児童側のオリエンテーションのあり方である。ごく稀なケースではあるが、特に教護、触法ケースの入所の際一種の騙しことば・安直なる約束・場合によっては嚇かし等によって入所を肯じさせようとするところがある。

事を急ぐのをあまり、心ならずもとられる策略ではあろうが、方法としては甚だ拙劣であり、あまりにも児童の人格をないがしろにする仕打ちであり、児童福祉にたずさわる者として愧死すべき所業であろう。

施設側の対応の場合は、“物的条件の整備”の点に於ては概ね必要にして十分なる準備がなされ、はば間然するところがないが、最も問題としたいのは“予め十分なるケース・スタディをなしおくべき…”という点である。

このためには、措置の理由・家庭及び現在の本児の生活状況・生育歴・身体的精神的発達の状況・行動性格の特徴・学校に於ける状況・習癖・嗜好や趣味・特技等々について遺漏のない資料が予めが予め施設側に与えられていなければならない。

しかるに大方の現状を見るに、入所の数日前、管轄の児童相談所から措置の理由・氏名・年齢・性別・出身地等に加えて本児の行動性格や家族についてのほんのあらまし＜が＞電話で施設長に通告してくる、という手続きがとられている。

施設の職員が予め児童相談所を訪れ、入所予定者の全貌を把む“見合い”がなされることが望ましいのだが、施設には仲々この余裕がない。

肝心の詳しい記録を網羅した児童台帳を施設側が手にするのは入所当日、というのがむしろしばしばである。しかも、その台帳は一通でしかないから、施設長又は主任指導員が当日あわただしく一読できたにしても、その他の職員が回覧されてくる台帳に十分、目を通すのには数日を要する。

ケース・スタディはその後にさなれるであろうから、処遇方針等の策定がなされるまでに無為に時日が経過していく……。

このことは、産みだされた嬰兒がそのままいくばくかの時間、放置されているのに等しい。

施設によっては、入所当日、又はその翌日職員を招集し、施設長が台帳を閲読し、ケースの概要を職員に把握せしめたるのち、処遇方針の策定等についてディスカッションを行うところもあるが、これにしても「何とかを見て縄をなう」式の甚だ姑息な策である譏りは免かれぬ。

入所児童についての、ある程度の詳しい内容についてすら職員が予め知悉できかねる状況にあつては、他の園児に対し、好ましい仲間づくりのための効果的な事前指導を行うことなど到底、期待できかねる。

(4) 児童相談所に求められること

以上指摘した入所児童の受入れ態勢の不備は措置機関である児童相談所側の責任に帰すべきものである。

しかし、このような安易なプロセスで、即ち事前に十分なるケース・スタディをなし得ざるがごとき状況のもとに入所措置がなされていることに強くプロテストすることもなく児童相談所の行うかかるイージーな事務的処理に従ってきた施設側にも一半の責めはあろう。

入所事務の粗放さは事務にたずさわる者の怠慢によるものではなく、冒頭でふれた一種の心理的マヒによるものと思われるが、いずれにしても一個の尊い人格をもつ児童の第二の生誕に処するにしては甚だ当を得ないものであると断じて憚らない。

論者は児童相談所に対し、いま改めて入所措置事務の重大さに思いを致し、周到な配慮がなされんことを望むものである。

そのための一つとして、末尾に掲げるがごときケース・ダイジェストを作成し、できうれば施

設の全職員に行きわたる部数のものを遅くとも入所の4～5日前に届け、予め十分なるケース・スタディがなされることを可能たらしめる手だてを講じておくことを提案したい（万止むを得ざる緊急保護のケースは別として）。

このケース・ダイジェストを入所の都度、作成するということは一見、まことに煩わしく、児童相談所にとっては酷な作業のごとく思われるが、実はそうでもない。

何となれば、この資料は入所に際しわざわざ作成するものではなくて、児童相談所で行われる診断会議、なにかんづく措置会議の折に既に整えられているはずのものであるからである。

いま児童相談所で実施されている措置会議を見るに、各部門の担当者（ケースワーカー・心理判定員・一時保護所の職員等）がこの会議のために整えられた資料を持ち寄り、それについて各人が口頭で延々と説明し、それが終わってから各自が意見を出し合い、このケースの措置、今後のケース指導上のポイント等について審議し、最終的には同席の所長の決裁を求めるという形が十年一日のごとく踏襲されている。

ケースによっては、児童の今後の全生涯の方向をも決すべき重大な措置会議が、単なるケース研究会にも劣る粗放なる進め方でとり行われていることは、納得できない。（ケース研究会ですら精緻なる印刷物が用意されている）

当然、各担当者が作成した資料のすべてが印刷され、おそくとも措置会議の前日に出席者全員に配布され、出席者はこれに十分目を通し、当日開陳すべき意見の腹案をもって会議に臨むべきである。（この方法によれば、当日、くだくだく説明することも必要なく、当初から審議にはいることもできて、慎重審議の時間も十分とれる）

もっとも、膨大な資料のすべてを印刷することが難事であれば、これらを要約したものを1～2枚作成し、会議の際は不備の点を口頭で補足しつつ審議を進める方法でもほぼ十分であろう。（小生の経験によれば、要を得たダイジェストであれば、当日の口頭による補足も殆ど不要。）

なお、この作成に当たる者は、当日の裁判長ともいべき児童相談所長であるべきであろう。

施設入所に際してはこの会議に使用せしダイジェストを施設の職員の数だけ増刷し、そのまま施設に送付すればよいのであるから、先述のごとく事務的な煩雑さなど殆どありえない。

施設側としては、これを職員に配布し、施設長は直接処遇職員、できうれば他の職員も招集し、それに記述されている社会学的判定、心理学的判定、及び総合判定の所見等を十分参考としつつ施設としての精緻な指導方針・計画を樹立するためのケース・スタディを行うことが可能となる。（要約で不満な点があれば、本体である児童台帳のコピーが施設に届けられた段階で第二次のケース・スタディのためにミーティングをもてば、ほぼ満足すべきものになる）

この殆どの職員に配布されるダイジェストにはもう一つの効用がある。

職員はこれによって予め新入所児童の氏名、年齢・出身地は言うに及ばず、嗜好・長所・特技等にいたるまで、しかも写されている似顔絵（又は写真のコピー）によって児童の面貌すら識っておくことができるから、おのずから入所時の対応が違ふ。

入所当日、児童は、自分を十年も前からの知己であるかのごとく応待してくれるすべての職員に接し、いかに心なごむことであろう。

いささかなりとも“歓迎されて入所（出生）”してきたという安らぎを彼に与えたいものである。この“こまやかな心づかい”の大切さは、いかに強調しすぎても強調すぎることはないであろう。

「児童は人として尊ばれる」(児童憲章)という理念の具現はこういうことではなかろうか。また、「初め良ければ終り良し」の箴言を、施設入所の場合でも名言として活かしたい。

2 養護の家庭化

- (1) 養護施設養護が論じられる場合、そのいわば花形的論点はホスピタリズムの実情・その解明・その克服等であり、その論議は百家争鳴的な観さえある。

中には、「いまや居住施設におけるホスピタリズムはさほどシリアスな問題ではない」とするずいぶんオプティミスティックな論も顔をのぞかせているし、ホスピタリズム論争の過程の中で一つの命題としてとりあげられた「最悪の家庭といえども最上の施設に勝る」から出発した論議は、それへの反論が嵩じて、既に昭和40年代の施設従事者研究大会の折に「施設はいまや家庭に勝る」と高言して憚りない発言すら生じている。

家庭機能の衰弱～死滅……言い換えるとそれに代る養護施設(又はそれに類するもの)の優位性を示唆するがごときものも現われている。(1例:David Cooperの“The Death of the Family”)

本稿においては、これらについて論評を加えることは一応措くが、私の児童福祉施設長・児童相談所長・児童福祉主管課長の実務経験、及び当県の実施した諸調査・研究からは「家庭はいまや死滅した」というわが国を含めた先進諸国の危機的様相をあまりにも過大視した認識には首肯できかねるし、かかる家庭の機能の衰弱から、それに代る児童施設の優位性を説こうとするがごとき甚だ飛躍したものと思わざるを得ない。

「最悪の家庭といえども最良の施設に勝る」……は、単なる格言的スローガンであり、言葉の綾であって、これについて諍々と大真面目に論ずることは啻うに堪えざることであるとしか言いようがない。

児童がいままで暮らしてきた家庭と、新しい生活の場を移していく施設との関係は、連続的なものであるべきだと考える。

従って、その新しい場には家庭のもつ第一義的役割りの多くが与えられるべきであろう。家庭の機能の衰弱についての歎きの声のかまびすしさは、おのずから、その優れた機能の礼讃を物語っている。

私は、ごく素朴にかの第1回児童福祉白亜館会議で採択された宣言である「家庭は人類が創りあげた、最も美しい文明の所産である」に示された児童養護の根本理念を尊重し、「施設養護は家庭養護のもつ優れた機能の採りいれをより積極的に図るべきである」との主張のもとに、施設養護のありようを論じたい。

以下、蛇足のきらいはあるが家庭のもつ本質的機能を3項目あげ、これとの対比において今後、養護施設に求められるべきものを述べていきたい。

(2) 家庭のもつ本質的機能

これを児童養護の面に限ってあげると

ア. 児童の生命・健康の保全、衣食住の保証、及び学校(幼稚園)教育の保証。

イ. 無条件的“安息の場”として明日の活力・英気を与える。

ウ. 縦及び横の愛情関係、相互の信頼関係で結ばれ、家庭という生活共同体の一員として所属の欲求が充足され、一家の発展のために力を合わせていくという安定充足した環境の中で豊かな

人間性の形成、人格の発展を図る機能。これを細別すると

(ア) 豊かな道徳性、情緒、情操を養い、その他の望ましい行動・性格を培う機能

(イ) 将来の良き家庭人・社会人としての基本的あり方、及びよき社会人・家庭人たらしめるために必須の知識・技能を授ける機能

これらは一見、何の変哲もなさそうに見える機能であろうが、多くの人は“宝の山”である家庭の中には入り込んでいるからそう観ずるのであって、施設児童の生活を家庭児童との対比に於てつぶさに観察している者にとっては、この家庭の機能は天上に輝く星のごとく讃仰に値いするものである。

施設は可能な限り、この機能を養護の中に採り入れていく努力を傾けるべきであろう。

「家庭は家庭、施設は施設」という甚だ直截的な割り切りは論者の最も嫌悪するものである。

「施設は到底かかる機能を有し得ないものであるから、施設のもつ独自の機能を一段と重視しその強化にこそ努むべきである」とする論は家庭養護の優位性の認識の欠如に基くもの、さもなくば、一種の敗北思想、或いはrationalization（合理化）のたぐいではあるまいか。

もちろん、施設の有つ独自の機能の優れた点を認めるのに決して吝かではない。それこそ、それはそれとして高く評価し、その上に家庭養護のもつえがたい優れた機能を付加していけばいいのであって、両者をentweder oder の図式の上で把えることは正しくないと思う。

(3) 家庭養護との対比に於て、施設養護に対する反省、検討の求められるべき点。

ア. 前述の(2)のアの項について。(custodial care としての機能)

児童の生命・安全の保全、衣食住の生活についての養護については、こんにち家庭児童に比べてあまり懸隔は見られない。ただ、住の点に於ては大いに不満が残る。最低基準の大幅な改善を要する。いまだ、中学生以上の年長児が狭少な居室に3人も4人も詰め込まれている、という現状は、衣食、殊に食生活が家庭児童のレベルに比して全く遜色なき状態に達しているのに比べ、あまりにも均衡を失っている。

学校教育が十分施されるための配慮の点に於ては、次の問題点が指摘されよう。

(ア) 学習室の不備

多くの児童、ことに年長児の学習にとって必要最少限の学習室・学習機の完備されていない施設はまだ少なくない。居室の一隅の蜜柑箱程度の学習機で宅習するか、食堂を夜間の学習室に充てざるを得ない貧しい学習環境のところも散見される。

施設によっては、その絶大なる努力によって高学年の児童のための学習室・家庭児童なみの立派な学習機等を提供しているところもあるが、いまのところかかる例は甚だ少ない。

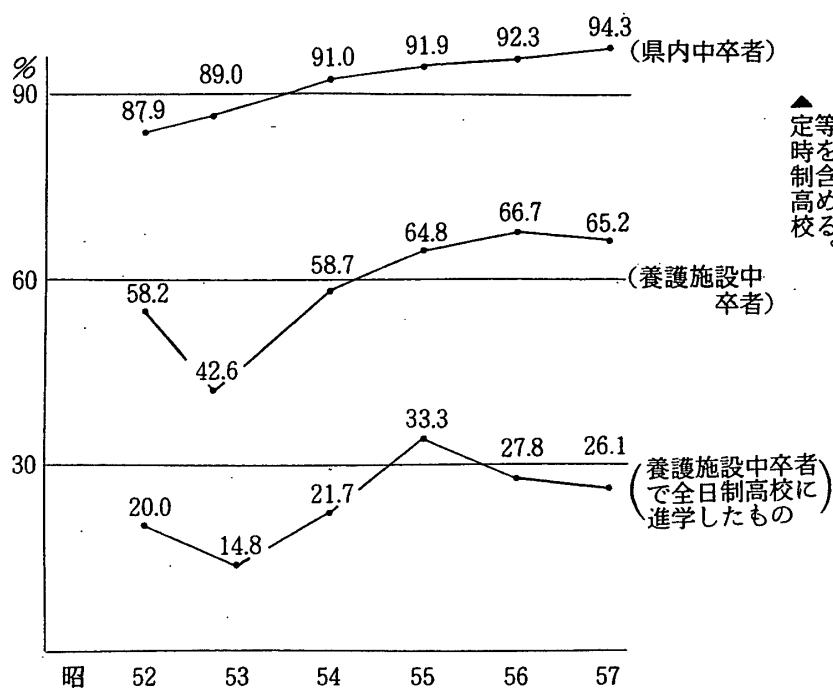
もちろん、これらの整備のためには相当の財政的措置を必要とするが、国・地方公共団体は施設側の痛ましいとも言える努力を拱手し、晏如としてこれを眺めていることは許されない。今後、着々となされるであろう施設全面改築の際は、ぜひこのことを最重点事項の一つとしてとりあげ、初度調弁的な予算措置についても特段の配慮を払うべきである。

(イ) 高校進学率の低位

当県においても家庭児童の全日制高校進学率は昭和57年度に既に90%を超えているが、養護施設児童のそれは僅か26.1%にとどまっている。

この原因として、在所児童の学習意欲の乏しさ、学力の不足が夙に指摘されている。

一方、児童の74.7%は高校進学を希望している。(昭58. 8. 在所児童実態調査)



▲定時制高校、各種学校を含めた上級学校進学率は、県内すべての中卒者のそれに比しかなりの懸隔はあるものの、いまや65.2%に達している現状を見ると、昭和30年代の進学率がゼロに近かった時代に比べ隔世の感がある。

▲59. 8 現在、本県の養護施設在所児にして高等学校への在籍している者は30名である。

図1 宮崎県の高等学校進学率の推移

環境的に不遇であればあるほど、少しでも有利な条件を備えさせて世に送り出すべきであろう。施設出身というハンディキャップに加えて中学校卒業だけの学歴という悪条件が重なれば、これが将来の就職結婚に少なからぬ障害となることは目に見えている。

学力向上のためには、前述の学習環境の整備を先決とするが、このほかに

a. 学力診断

まず児童相談所の一時保護の折、このことは十分なされるべきである。

何が故に学力が十分身についていないのか、どの学年の課程にかける基礎学力に欠落が見出されるのか、についての的確な診断が先決であると思われる。

b 学習意欲の振起をはかるためのさらゆる手段を講ずる。

c 学習指導

施設は家庭であるから指導員（保母）が宅習指導を行うのはたてまえと言われない。即ち、家庭であれば親であるこれらの職員は“宅習が十分行われるための配慮に努めればいいのであって、これら職員に家庭教師の役割りを果たさせることはもともと当を得たことではない。しかし、現実の養護施設児童の状況は、このたてまえ論では如何ともしがたい様相を呈している。

だが、ここにも障害がある。これらの職員は5日～7日に1回の当直であるから一貫した系統的な宅習指導は行い得ない。しかも、彼等には保母・指導員としての固有の、煩瑣な業務に忙殺されているから、しょせん宅習指導はおざなりのものとならざるをえない。

そこで、

(a) 宅習指導員の配置

最も効果的な対策であろう。ただし、常勤職員として配置することは不可能に近いと予想されるから、“非常勤職員”として都道府県等に単独措置を講じてもらう必要があらう。げんに、当県においては児童相談所の一時保護所、及び、一部の公立児童施設（居住型）には夜間の保護・指導に当たる非常勤指導員の設置が既になされているのだから、職種の違いはあっても実現の可能性なしとしない。

(b) ヴォランティアへの協力要請

一例をあげるとBBS活動の一つとしてとりあげてもらう方法も考えられる。

ただ、宅習指導となると、協力者はごく少数に限られる難点がある。また、市街地以外のところに所在する施設にあっては協力者の確保が難しいであろう。

イ. 前述の(2)のイ. 項について。(安息の場を与える機能)

児童にとって無条件的、唯一の憩い安息を与える機能については施設は家庭に比してあまりにも貧しい。

人的、物的制約の多い施設がこの面の機能を家庭のそれに近づけることの困難であることは十分承知しているが、以下述べる点に於ては検討、改善されうる余地が多分にあると思われる。

(ア) 集団生活上の規制の緩和

安息の場としての施設の生活の中に諸規則が多過ぎるきらいはないであろうか。

児童は、その大部分が学校に於けるかなり厳しい規制的生活（それは当然必要なものであるが）の数時間を経て施設に帰ってくる。荒波にもまれて港に帰った船が碇をおろして、しんから安息できる停泊できる場が必要であるように児童もバネを弛めて心身の疲れを癒やす憩いの場を求めている。この憩いが明日の活力を生む。

規制を緩めるといってもそれは決して自堕落を許すということではない。放恣的な行動に陥ることは厳に戒めつつも、児童が自発的・自主的に行動できる許容時間をもっと与える、

ということである。規制や職員の指示によって行動を強いられる時間の中では心身の安息は得がたいからである。

宮崎県の児童問題調査研究事業のレポートのうちの養護施設退所者についてのアンケート調査の結果の一つを参考としてあげてみよう。(昭和58年8月実施のもの)

「規制があり、自由がなく……」と退所者が言っているから、それに安易に迎合すべきだ、と言うのではない。規制そのものはある程度、ぜひ必要なものである。要は、その程度の問題だ、と言いたいのである。また、児童の生活のリズムやテンポを無視した画一的・強制的な日課に陥ることも厳に戒むべきことであろう。(たとえば、年齢を無

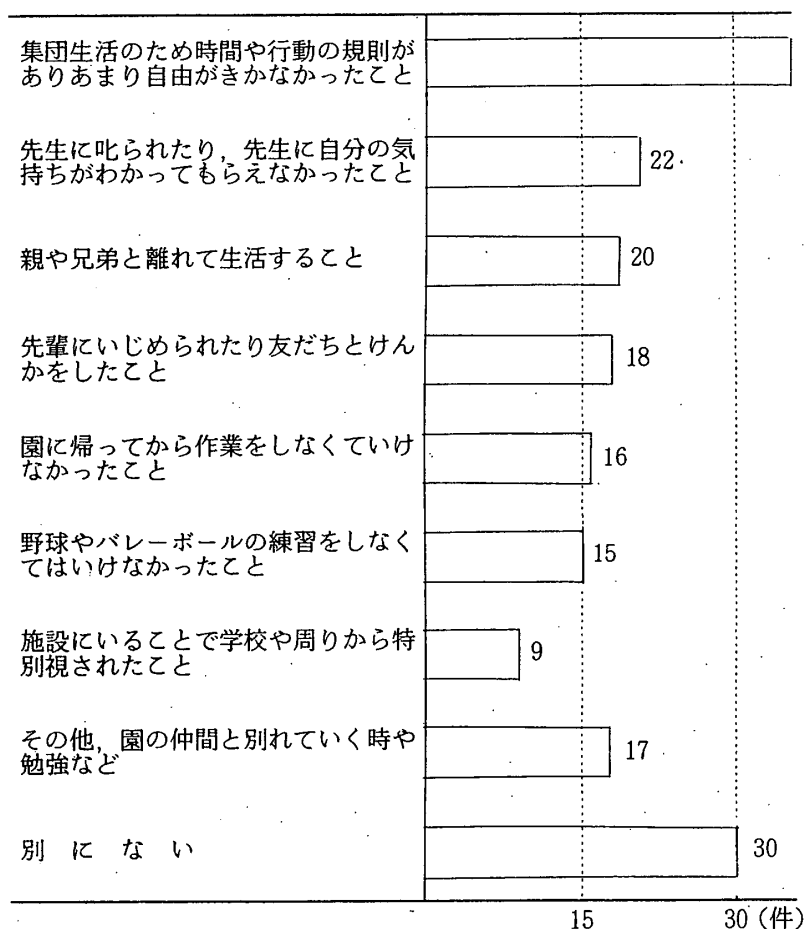


図2 施設生活でつらかったこと (有回答 172人)

視した画一的な就寝時間少なすぎる食事所要時間、等々であるが、これらが職員の勤務条件を優先させる立場から定められることが全くないとは言えない。）

児童の行動が起床してから就寝に至るまで職員の命令・指示・ベルによる合図等で操られていることも児童の自発性・自主性の伸長を阻むものの一つであろう。彼等はこのような指示に従って単に受動的に行動することを旨とする“己れに忠実ならずしても、もっぱら他に忠実なるオネスト・ジョン、マリオネット的人間”に形づくられるおそれが多分にある。

集団生活のスムーズな遂行のために必要な他動行動は最小限にとどめ、児童をして自動的に行動せしめる手だても講ずる必要があろう。

起床しても食事にしても、その他のことにしても、児童が園内に備えられている時計を見て自発的に行動を起こすよう指導するの一法である。

(イ) 一家だんらん

食事・入浴等も、質の高度な一家だんらんのひとときとして位置づけられるべきである。職員を囲んで、談笑しながら、家庭的な食器を用いて、時間を十分かけて食事を味わうことは児童にとって無上の歓びであり情緒の安定、家族の一体感の醸成に資するところ大である。

入浴にしても、家庭の幼児のもつあの楽しみ——浴槽に玩具の舟を浮かべ、父（母）と一緒に歌を唱う、文字通り肌の触れ合いをもつ——は、施設では到底叶えられないことなのだろうか。

ウ. 前述の(2)のウの(ア)について（なかんずく、豊かな情緒・情操を培う機能）

この項では、“感謝の念の涵養”について家庭児童との対比において論じてみたい。

そもそも感謝の念が養われるためには、“take”の体験を豊富にもつことが必要である。他の者から何らかの物質的・精神的なものを“ありがたいもの”として受けとる、という体験である。

家庭の児童は、親から、兄姉から、親戚の者から、そして近隣の人たちから、多くの場面で豊かなtakeの体験をもつ。しかし、施設の児童にはこれが非常に乏しい。これらの恩恵を与えてくれる家族は日常全くありえないのであるし、近隣の人たちとのふれ合いも皆無に等しい。その他の社会的な接触も家庭の児童に比し著しく少ないから、いきおいtakeの体験はごく乏しいものにならざるを得ない。

もっとも最近の施設も地域から閉ざされた施設からの脱却を図りつつあるから、ボランティアや地域の人たちから何らかのものをtakeする機会と場が増え、感謝の念の涵養という点に於ても好条件に恵まれるようになってきている。地域社会への融け込みということが更に更に進めらるべき所似の一つがここにもある。

しかし、takeの体験の積み重ねだけではまだ不十分である。逆に“give”……つまり他の者に物的・精神的な何らかのものを施すという体験が必要である。子どもが何らかの恩恵を他に施せば、相手はこれに対して精一杯の感謝の気持を表現する。この反応はgiveする者にとって欣びであるだけでなく、同時に相手の示す歓喜の情緒への共感から感謝の念の体得が図られる。

家庭の児童は先に述べたように実に多彩な人間関係の中で、このgiveの体験をも豊富にもつことができる。

これに反し、施設児童はこのgiveの体験に到っては更に貧しい。

施設児童に感謝の念が醸成されないのもむべなるかなである。

施設職員は児童のこの面の情緒的・情操的な貧しさを徒らに歎ずる前に、より多くの give の体験を積ませる手だてを講ずべきである。ころみに、幾つかの実例を示してみよう。

▲お手伝い

家庭児童であれば家事一切（掃除・洗濯・調理・配膳・給仕・食事の後片付け・布団干し・買物・弟妹の世話）、更に父親の車の洗車・諸修繕・家庭菜園づくり等への参加は、子どもにとって当然の行為とはいえ親へのサービス・お手伝い、つまり give の行為として位置づけられている。

施設児童の場合、これらの多くは日課として定められているから、サービス、つまりお手伝い、という概念としては把握されがたい。

そこで提案したいのだが、これらの厳格に義務づけられている行為の一部を日課の概念から切り離してみ、児童をして自発的に参加せしめる領域のものとして位置づけてみてはどうだろうか。

（当然、園児としてそのすべてがつとめるべきものは自由裁量のものとはなりえない。）

更に家庭ならではできかねると思われてきているお手伝い——たとえば、園や職員の購める物品の買い物、職員の乗用車の手入れ、近隣の家への走り使い等にまで範囲を広げることと考えられていいであろう。

▲地域へのサービス

地域に所在する公共施設（公民館・神社・道路・側溝等）への労力奉仕等は既に意欲的に行われているが、これを一步二歩進めてひとり暮らし老人・障害者・又は身障害児（者）福祉施設の入居者等に対する奉仕活動など、give の体験を豊富ならしめる手だてはいくらでもあろう。

更に広く、市町村又は市町村社協等の行う地域福祉活動の一端をになわせるのも一法であると思う。青少年団体（子ども会・みどりの少年団・JRC等）に所属させ奉仕活動に挺身させることの大切さは言うまでもない。

エ. 前述の2のウの(イ)の項について。（将来、有為な社会人たるべく育成する機能）

“将来の良き家庭人・社会人としての基本的あり方を授ける機能”を家庭の本質的機能の一つとしてあげたが、家庭児童は親との生活の中で男親又は父親というもののあり方、又は夫婦としてのあり方等を学んでいく。

きょうだい関係を通して将来の社会人として人間関係づくりの素地が形成されていく。

更にまた、同居、非同居たるを問わず、祖父母と家人とのふれあいの中に高齢者へのいたわりの心情が養われる。

施設の場合、この客観的条件の殆ど～すべてを欠いているわけだから、これらの学習をいかに進めるかは至難の業である。今後の研究課題として保留しておく。

“将来の有望な家庭人・社会人となるための必須の知識・技能を授ける機能”の項に於ては検討工夫を要するものが多い。

必須の知識・技能の主なものを次にあげてみる。

- ① 礼儀作法の一切
- ② 交際の仕方

▲来客のもてなし方

▲近所・親戚の人とのつきあい方

▲地域の人々との交じわり方

③ 家事一切についての知識と技能

④ 経済観念

⑤ 高齢者への仕え方

⑥ 年中行事のもち方

⑦ 社会人としての果たすべき義務、享受すべき権利についての知識

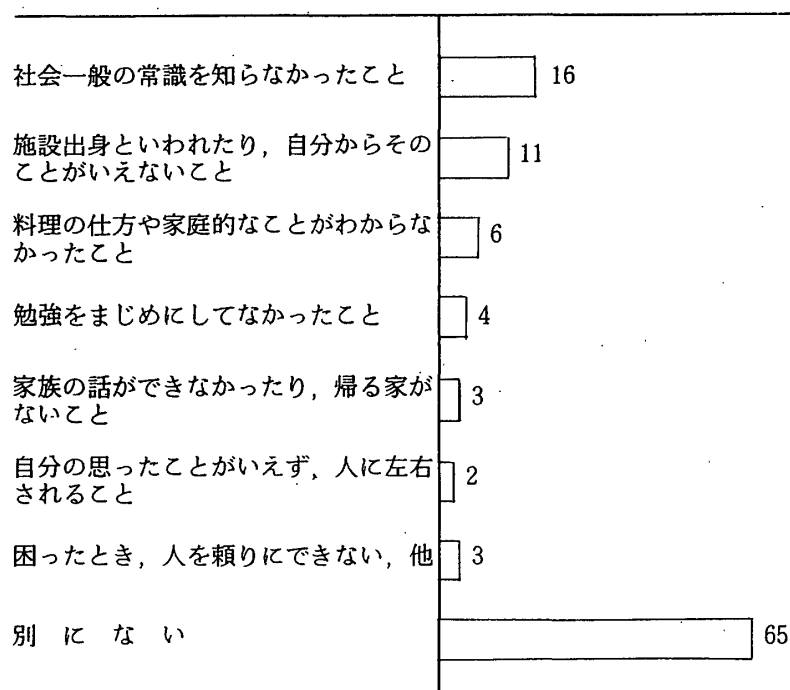
⑧ 余暇の活用の仕方

上記の①については一応問題はないと思うが、施設に於けるこの教育がややもすると施設の内外における狭い範囲の礼儀作法のそれに偏ってしまわないよう留意する必要がある。

問題は②の交際の仕方、についてである。家庭の子どもは見よう見まねで、或いは親の意図的な躰によって、挨拶の述べ方、座布団や茶菓のすすめ方、到来物のいただき方とお礼の述べ方、談話のすすめ方等克明に学んでいく。近所の人たちとの交際のマナーや、しきたりなども自然に身につけていく。

家事一切についての知識と技能も家庭の子は親から意図的に授かる教育、或いは、見よう見まねで習得していく。

しかるに、施設の児童はこれらの面の無意図的・意図的教育を授かる条件に恵まれていない。退所者を対象として実施された前掲のアンケート調査の別の項目のものを参考としてあげよう。



▲ 家庭児童は、母親と買い物と共にすることによって“賢い消費者”たるべき教育をも授かっていく。施設児童においてはこの経験は皆無に等しい。

▲ アンケート調査を更に年長者を対象として行うならば、この社会常識の欠如、家庭的なことについての無知の歎きの数字は更に増えるであろう。(今回の調査では25歳未満の者が大半。) この面の欠陥をいささかも克服しようと試みつつある養護施設も若干見られるようになった。ある施設では、そ

図3 退所後に困ったこと (有回答 110人)

の一隅に、家庭の調理台と全く同じものがしつらえてあり、家庭の調理についての知識・技能が年長の女子に授けられている。調理のみならず、できたものの配膳、その食べ方、又はお客へのすすめ方、給仕のマナー、あと片付け等について、きめこまかに教えこまれる。

他の施設では、一般の家屋をそっくり購入し、そこで実地に、一切の礼儀作法・家事の持ち方等の躰けがなされている。

これらの教育的配慮は画期的なものであり、その効果は刮目して期待されるものがあるが、これを以てしてもまだ十分でない憾みもあろうから、ここで夏休暇等を利用して、しかるべきボランティアの家庭に“留学”させ一種の home stay training を施す方法を提案してみたい。しかし、ある程度の長期間の委託であるから、それ相応の経費も要するし、引き受けていただくボランティアの事前研修の実施、及び、不慮の事故ありたる場合の補償 ― 等についても万全の措置を講じておかなければならない。

このため、ある程度の制度化が必要であるが、これは、三者 ― 施設・児童相談所・及び都道府県の主管課の熱意が凝集するならば、実現は決して困難なことではないと思う。

なお、さきに紹介した家事訓練室は、この家庭委託訓練の予備訓練、及び、委託訓練終了後のアフター・トレーニングの施設としての活用することによって、更にその機能が高められるであろう。

(4) 経済観念の涵養について

家庭の児童は、親が孜々営々として稼働することによって得られる報酬で一家が生計をたて、小遣銭にしても、この貴重な親の収入の一部が割かれていることを実感している。

また、買い物にしても、1円でも安く、同じ価格であっても少しでも品質の高い物を得ようと苦心している母親、毎月のやりくりで頭を悩ましている両親の姿がモデルとなっている。金銭の価値について、日常きびしく教え込まれる。年長になれば家計の状況がある程度うかがい知ることができし、親がその実情を率直に子どもに披瀝することも可能である。

また、買い物のお手伝い、という体験を通して、少額の金といえどもおろそかにできないことを身に沁みて体得することもできる。

かくして、おのずから正しい経済観念が徐々に養われていく。

施設児童に上記のような実感・経験をもたせることはたしかに困難なことではある。園の運営のための経費は措置費という形で何の苦労もなくは入ってくるのであって、よしんば「これは国民の血税で賄われているのだ」と説いてみても、それは実感となって追ってこない。

この経済観念の涵養という点に於ても施設は条件的に恵まれていない。しかし、その中であっても有効な手だてがないわけではない。

いな、研究・工夫によってより有効な手だてが開発される余地は十分あると思われる。

いくつかの例を示してみたい。

▲ 日用品その他の必需品も敢て支給という形をとらず、金券の発行によって購めさせる。

▲ 買い物のお手伝いをさせる。

(職員の個人的な買い物の場合がむしろ効果的であろう)

▲ 年長児の場合は、いわゆるアルバイトをさせ、どの程度の労働にいかほどの金銭が報酬として与えられるかを実感させる。

結 び

養護施設の養護理念としてあげられているものは、①人間性回復の原理、②個性尊重の原理、③有為なる家庭人・社会人育成の原理、④親子関係調整の原理 ― 等であるが、本稿ではこのうち①

②③にかかわるもののごく一部を論じてみた。まさに氷山の一角に手を触れただけである。

しかし、この片々たる小論を通して訴えようとしたのは、児童を人間として尊重する養護ということであった。また、敢て空疎なる机上論に墮することを排し、実務に即した所論たるべく意図した。

④の親子関係の調整の原理については稿を改めて論じてみたい。“養護施設入所の日から家庭復帰は始まる”は、けだし名言である。

家庭→養護施設→再び家庭と、そこには連続性がなければならぬと信ずるのだが、この原理は、いささかといえども見忘れられてはなるまい。

(1984年9月30日受理)

参考文献

- 宮崎県児童家庭課 1984 宮崎県の養護施設退所児童実態調査
 宮崎県児童相談課 1984 宮崎県の児童福祉業務概要
 宮崎県中央児童相談所 1982 宮崎県児童相談所紀要

<資料>

表1 ケース・ダイジェスト

教・触 押 ○ ○ 子 ○○市 2-6-10 (161)	イ. } 省略 ウ. }
<p>1. 問題行為(過去のものまで含めて)</p> <p>(1) 学校通告(45. 1. 28)</p> <p>ア. 44年度(小4)2学期に到り学業成績俄かに低落。</p> <p>イ. 怠学エスカレートし、3学期には殆ど出席せず。</p> <p>ウ. 異常なほど母子分離不安の症状みとめられる。</p> <p>以上の主訴により、ケースとして受理、かつ45. 1. 31~2. 28一時保護。45. 2. 14児童福祉司指導の措置をとる。46. 4. 12措置解除[この間の経緯については後段に詳述]</p> <p>(2) 養護性</p> <p>「自分一人だから施設に入れてくれ」と当園を。本児が訪れ訴えたり、と。直ちに学校にTEL。照会せしところ、監護者なく緊急保護の要ありと認め、一時保護す。</p> <p>(3) 教護性</p> <p>ア. 本年度11月末現在の怠学は既に94日に及ぶ。</p> <p>イ. } 省略</p> <p>ウ. }</p> <p>(4) 触法行為</p> <p>ア. 母親のパトロン(後述)の金、1万円を彼の自宅で窃取</p>	<p>2. 家庭の状況</p> <p>(1) 家族</p> <p>ア. 父親</p> <p>(ア) 52歳。幼児から左半身マヒ。性格の偏倚甚し、という。42. 8から精神分裂病にて梅が丘精神H. 入院。現在欠既に廃人同様(生保適用)</p> <p>(イ) 入院前も性格の偏倚甚だしく、ことにアルコールが入ると、ますます乱暴となる。父親、夫、社会人として全く無能なる人であった。また、甚だ不細工な男前で、よく本児の母がこんな男と一緒にいたものだと思う。(福祉事務所)</p> <p>イ. 母親[47. 9. 20出奔]</p> <p>※(ア) 44歳、父親とはいとこの関係。</p> <p>(イ) 赤ら顔、体格よし</p> <p>(ウ) けじめのないルーズな感じの人</p> <p>(エ) 養育態度</p> <p>消極的拒否と溺愛の矛盾型</p> <p>その実例</p> <p>▲ } 省略</p> <p>▲ }</p> <p>(オ) 中年(?)某と不倫なる関係あるものの如し。(本児はこのオジチャンをひどく憎み、母が彼に出した茶碗を足でけとばせしことあり)この男、しばしば泊まっていたようだ。</p>

(以上、福祉司の調査)

- (カ) }
 (キ) } 省略
 (ク) }
 (ケ) }
 (コ) }
 (サ) }

(以上、児童委員より聴取)

(シ) 人物像

- a. 正直だが派手好み。(児童委員の言)
 b. }
 c. } 省略
 d. }

ウ. きょうだい

(ア) 兄(同居)

- a. 小5のとき、養護施設。卒園後(42.8) 県外就職。母の出奔により帰省。近く再び県外に行く予定であるとのこと。現在左官。
 b. 47.10.某氏宅に侵入し、同家の娘にナイフをつきつけてスゴむ。110番にTEL。たい捕。真の動機は不明、罰金刑。

(イ) 兄(次兄)

- 18歳。怠学ありたい。(I.Q.60)
 43年、〇〇学園入所。
 44年、塗装店に就職。到現在。

(ウ) 姉

- a. 17歳。工具。表情些か陰うつなり。
 Werの問いには卒直に答える。彼女も亦、学校在学中は成績不振にして、学校ざらいであった。

- b. }
 c. } 省略
 d. }

(エ) 本児と、これらきょうだいの、親の扱いについての差異

- a. }
 b. } 省略

(2) 居住環境。その他

ア. 家屋等

自家。一戸建。一見して生保世帯と分るような家屋。通学距離約3km。徒歩。

イ. 近隣の風評

母親は出奔、子どもらはいずれも過去に問題ありたることもあって風評は芳しからず。

ウ. その他

- (ア) }
 (イ) } 省略
 (ウ) }

(3)

ア. 父方

- ▲祖母 }
 ▲伯母 } 省略
 ▲叔母 }
 ▲叔父 }

イ. 母方

- ▲祖父 }
 ▲祖母 }

以上は、すべて
 扶養能力十分ならず。あるいは
 能力ありてもその
 意志なき模様。

似顔絵、又は、写真のコピー



3. 本県の状況

(1) 生育歴

ア. 出生～乳幼児期

- (ア) 出産は正常。初生児疾患なし。
 (イ) 3～4月の遅滞で発育せしものの如し。
 (ウ) 1年保育。保育所では、特記すべき問題行動なし。ただ、保護者の過保護ありしものの如し。

イ. 小学校時代

(ア) 各記録

		I	II	III	IV	V	VI
病	欠	10	10	10	11	14	12
事	欠	1	0	0	20	16	4
常 習 記 録	こくご	2	1	1	1	1	1
	社 会	1	1	2	1	1	1
	さんすう		(オール1)				
	理 科	1	1	1	1	1	2
	音 楽	3	2	3	2	2	3
	図 工	3	2	2	1	2	3
	家 庭					2	2
基 本 習 録	体 育	3	3	1	3	3	3
	基本習		(オールB)				
	自主性			"			

行動および性格の記録	責任感			〃			
	根気強さ	C	B	B	B	B	C
	自省心						
	向上心			〃			
	公正さ			〃			
	指導性			〃			
	協調性			〃			
	同情心			〃			
	公共心			〃			
	積極性			〃			
	情緒安定	B	B	B	C	C	C

	事実の記録	行動所見
I	忘れ物多し。 帰宅したがらない。	無邪気。とりかかりが おくれる。根気乏しい。
II		
III		
IV	省略	
V		
VI		

B.

1. 一時保護観察記録

(1) 経過記録

日時	経過記録

(2) 総括記録

(3) 一問保護所の所見

2. 心理判定

3. 総括方針

以下Ⅱ2の家庭における状況、及びⅡ3の心理判定、一時保護記録につづく。(省略)

表2

ケース・ダイジェストは、この項目に従って作成される。(宮崎県中央児童相談所作成)

面接調査・訪問調査の際、網羅すべき項目(教護・触法の部 Ⅱ1)

④ 家族の状況

1. 氏名、生年・月日、略歴、結婚歴、宗教、その他特記すべきもの。

2. 保護者の職業

(1) 職場 (2) 稼働時間 (3) 収入

(4) 離宅・帰宅の時刻

(5) 休日の回数・そのもち方

(6) 今後の計画

(7) 出稼の場合

ア. いつから、いつまで

イ. 通信の状況

ウ. 仕送りの状況

エ. 帰省の状況

オ. 出稼のメリットとデメリット

カ. 家族の対応

3. 家族の健康状況

(1) 頑健、健康、病弱のいずれか

(2) 病弱であれば

ア. 病状 イ. 通院・入院の状況

ウ. 家族に及ぼす影響(物心両面)

エ. 今後の見込み

(3) 身障者であれば

ア. 障害の種類

イ. 等級

ウ. いつからであるか

エ. 生活上の具体的なハンディキャップ

4. 社会保障

(例) ▲〇〇年金受給、又は、申請中

▲生活保護受給、又は申請中(その種類)

▲母子福祉資金の貸付を受けている、又は申請中(その種類)

▲失業保険、その他の保険関係

5. 保護者の人物像

(1) 人から

学校教師・児童委員等の第三者からも聴取のこと。

(2) 人生観、教育観等

(3) 表域における状況

ア. ……の役職に就いている。

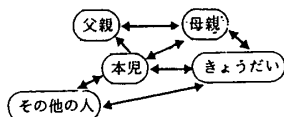
イ. その他

6. 保護者の、本児への期待

- (1) 矯正したいと思っている点
- (2) 進路
- (3) 親をどうしてほしいと思っているか

7. 人間関係

それぞれを
詳しく



8. 保護者と、本児との接触状況

- (1) 対話の状況
- (2) 共にすることの状況
 - ア. 家事
 - イ. 趣味
 - ウ. レクリエーション
 - エ. 外出
 - オ. 食事
 - カ. テレビ視聴
 - キ. その他
- (3) 休日はどうしているか
- (4) 学校（保育所・幼稚園）の行事への参加状況
- (5) 弁当・オヤツなどどうしているか
- (6) 宅習にはどの程度、かかわっているか

9. 養育態度

- (1) 品川氏の10種類に分類
- (2) 顕著な具体的事実（できるだけ数多くあげる）

（例）「朝食もとらず登校させることが週に1～2回ある」

10. 保護者は、本児をどう見ているか

- (1) 能力
- (2) 性格の長・短所
- (3) きょうだいと比べて……である
- (4) 本児の問題行動の原因を、どう見ているか

11. きょうだいの状況

- (1) 能力
- (2) 性格
- (3) 出席状況
- (4) 問題行動の有無・状況
- (5) 保護者の扱い方に、本児との差異はないか。
もし、あればその状況
- (6) 希望進路（保護者と本人）

12. 同居者の状況

特に、本児とのかかわり

13. 保護者と、保育所・幼稚園・学校との関係

- (1) 学校（保・幼）とは親和的・信頼的・協力的か
- (2) 教師をどう見ているか
- (3) 本児の問題行動と、学校との関係をどう見ているか

14. 家庭の、地理的・物理的環境

- (1) 居住地域別
- (2) 家屋の状況
- (3) 周囲の状況
- (4) 通学（園）距離・方法

15. 欠損家庭である場合

- (1) いつから、そうなった理由
- (2) 生別であれば、去っていった父親（母親）に対する家族・本児の感情と態度、及び現在のかかわりの状況
- (3) 今後の希望
 - ア. この状態をつづけたいか、どうか
 - イ. 復縁、再婚の意志があるか
- (4) 福祉的ケア

前記の項目4を除いたもの

- （例）▲つなぎ資金のこと
▲母子会への加入のこと
▲介護人派遣のこと

16. その他

- (1) 担当の児童委員
- (2) 諸納入・償還の状況
- (3) 保護者その他の家族の犯罪歴の有無
- (4) 家庭の文化的雰囲気

（例）▲新聞・雑誌購読の状況
▲保護者の趣味

⑤ 本児の状況

1. 主訴

- (1) 具体的に、詳しく、かつ経過的に
- (2) どの程度を最も強く訴えているか
（主訴のカムフラージュに注意）

2. 生育歴

- (1) 胎時期
- (2) 出生時
 - ア. 歓迎されて出生せしや否や
 - イ. 熟産・安産、又は、そうでなかったかその状況
 - ウ. 体重、健康状況、その他

(3) 乳児期～幼児期

ア. 健康状況

イ. 行動や習癖に特異なものはなかったかその具体的状況

ウ. 主たる養育者と、その養育態度
(具体的、客観的に把握すること)

エ. 遊び、交友の状況

オ. 成長・発達状況

カ. 絵本・玩具等の与え方

キ. 食事・オヤツの与え方

ク. 第一反抗期の状況

ケ. その当事の家庭環境

(特に家族の人間関係に重点をおいて調べる)

(4) 少年期

ア. 健康状況

イ. 行動・習癖の特徴

ウ. 主たる養育者と、その養育態度

エ. 日常生活の状況

(ア) 宅習

(イ) 交友

(ウ) きまり正しさ

(エ) 保護者との接触

(オ) こづかい銭、オヤツ等の与え方

(カ) 読書の習慣

(キ) 休日の過ごし方

(ク) その他

保育所・幼稚園・学校における状況(過去及び現在)については、必ず照会書によるレポートをとること。

3. 現況

(1) 家庭における状況

ア. 行動・性格の特徴

イ. 本児は、家族のそれぞれをどう見ているか

(ア) 人から

(イ) 好悪・その理由

(ウ) その他

ウ. 日課・生活時間等

(ア) 起床の状況(時刻・自主的かどうか、その他)

(イ) 洗面の励行状況

(ウ) あいさつの励行状況

(朝、夕、食事のとき、家を出るとき、帰ったとき、その他)

(エ) 朝食の摂取時間

(オ) 登校(園)の状況

(カ) 忘れ物したとき、どうしているか

(キ) 帰宅時刻、帰宅後の状況

(ク) 遊びや交友の状況

(ケ) お手伝いの状況

(何の手伝い・どの程度の時間)

(コ) 身辺処理の状況

(着がえ、自室の清掃、洗たく等)

(サ) 入浴の状況

(シ) 夕食の状況

(時刻、だれと、テレビ視ながらかどうか)

(ス) 夕食後の過ごし方

(セ) 宅習の状況

(ソ) 読書(何を読むか、どの程度)

(タ) テレビの視聴(時間、好む番組)

(チ) 就寝の時刻

(ツ) こづかい銭(金額、与え方、使途)

(テ) 半ドンや休日の過ごし方

(ト) 塾や、稽古ごとに通う状況

(ナ) 夜間外出・外泊の状況

[以下略]